

寺の本堂の裏戸には、不用のガラク

タが詰め込まれている。小さな寺の住職でもある私が、その裏戸を整理していたら、「本郡日露役戦死者」という表題のついた掛け軸が出てきた。そこには百十四人の戦死者の名前が、村ごととに並んでいた。松江村 矢作留吉君 恩田幸吉君……、砂村 稲垣茂吉君……というように。そして末尾に、「大正七年八月 東京府南葛飾郡松江村西一之江 発願主 矢作善次郎」という当寺の檀徒の名が記されていた。

郡内すべての戦死者名が記されているのかどうか知らない。葛西村や金町村のように一、二の名前しかない村もあるから、たぶん全部の戦死者名ではないのかもしれない。大正七（一九

学校や地域の、身近な戦争の記憶

奥平 康熙

●和光学園理事長

一八）年は第一次世界大戦終戦の年でもある。善次郎さんは世界の戦死者の霊を弔い、この軸を寺に納めたのであろうか。

「本郡」とは東京府南葛飾郡のことであり、現在の葛飾区と江戸川区の全域と、墨田区と江東区の東部地域とを合わせた地域であった。日露戦争が激戦であり、双方に多数の死者があったことは知っていたが、私にとって遠い昔の他人事（ひとごと）であった。自分の身近な地域の村々から、これほどたくさんの方々を出している、などとは想像したこともなかった。この掛け軸で日露戦争は急に私の身近な具体的事象になった。

日露戦争は一九〇四年二月から翌年八月までの一年半の戦争だが、その間に一つの村から十人もの戦死者が出たのだ。あそここの家でも、またあそここの家でも、という状況だったに違いない。ちなみに日露戦争の日本の戦死者は五万五五五五人、負傷者は一四万四三三二人だった（外務省調査部の研究報告書「日清戦争ヨリ満州事変ニ至ル日本外交ノ経済的得失」一九三六年十一月）。当時の人口は五千万人弱だから、死者は総人口の〇・一％だった。

十数年前、イギリスの北部の田舎町で見た小学校校門脇の世界大戦記念碑を思い出した。ある町の初等学校には

大きな大戦記念碑があった。そこには

その学校の教師と卒業生の戦死者の名前が列記された銅製プレートがはめ込まれていた。一つのプレートには、

1914—1919の下に、J.BROWN、機関

銃隊兵卒、……、もう一つのプレート

には、1939—1945 A.BURTON、

医務官、大尉、……というように、そ

れぞれ十余名の名が列記されていた。

また、北海に面した小さな港町の小学

校の門前にはもつと素朴な石碑があっ

た。そこにも教師と卒業生の戦死者名

が、C.A. DAVIDSON、二十二歳 一

九四四年四月十八日 北海 ○○島付

近で戦死、というように、具体的に最

期の場所と月日付で並んでいた。

子どもたちは毎日校門脇の石碑を見

る。おそらく人口移動もほとんどない

小さな町では、石碑に記された戦死者

名を見て、これはあの家の人だ、これ

は何ちゃんの家の人だと、親から教え

られる。戦争の記憶は、身近で具体的

になるに違いない。

日本では毎年、夏になると戦争の記

憶が、映像で、証言で、テレビや新聞

に登場する。その記録は具体的に優れ

ているものが多い。多くの人たちは、

あらためて平和の大切さを心に刻む。

しかし、やはりしだいに遠いところの

話になってしまっだろう。イギリスの

あの学校のように、戦争犠牲者を具体

的に伝える石碑をもつ学校が、日本に

もあるのだろうか。旧師範学校の校内

では、学徒出陣戦死者名列が墨書され

ている名板列を見たことがある。墓石

や過去帳には、戦没地や死因が添えら

れていることもあって、生々しい。あ

の学校前の戦死者の刻印には、戦争の

抽象化に抵抗する力がある。

学校でも、寺や神社でも、地域の戦

死者を具体的に伝える石碑があったら

いい。戦没者慰霊塔というような抽象

的な碑ではなくて、地域の具体的な戦

死者の事実が記された石碑がいい。学



校が統廃合ということになったら、○
○小中学校跡地と記した石碑と、当校
出身戦死者名列記の石碑を、いつまで
も並んで残してもいいし、集落の公共
の場所に、旧学校名と一緒に移しても
いい。

間もなく戦後七十年、今残しておか
ないと、戦争の身近な記憶は全く消え
てしまう。戦争は現在につながる一人
ひとりの具体的な死者とともに、記憶
されなければならない。